基幹メディアへの基盤固まる

月刊「ニューメディア」2011年2月号から連載を始めた本特集の最終回。ついに新BS19社・団体の全代表にインタビューしたことになる。最終回では、基幹メディアBSの基盤が固まってきたことをまとめ、WOWOW、BS釣りビジョン、グリーンチャンネル3局の代表へのインタビューを掲載した。インタビューに快く応えてくださった19社・団体の皆様に感謝申し上げたい。

（構成：天野昭／写真：新井誠／資料提供：日本放送協会＋㈱放送衛星システム）

BSAT-3cは2011年6月に打ち上げ予定

BS新時代のインフラとなるBS+CSハイブリット衛星：BSAT-3c/JCSAT-110Rが2011年6月29日に打ち上げられる予定だ。打ち上げに成功すればBSAT-3a、3b、3cの3機体制が整い、インフラ面の基盤が磐石となる。

思えばBS開発の歴史は苦難の歴史に彩られている。

東京五輪開催の翌年（1965年）にNHK衛星放送構想が発表されてから約半世紀が経つ。そもそもBS放送は放送の難視解消を目的に開発されてきたものだが、NHKは東京五輪直後から次世代テレビ方式として高品位テレビの開発に着手してきた。つまり、BS開発の歴史は高品位テレビ（HDTV）開発の歴史と軌を一にしたものだ。もちろん、BS開発もHDTV開発も次世代テレビの世界標準を当初は目指したものではないが、結果としてHDTVは世界標準になり、伝送手段はBS、CS、地デジなど多様な方法により、今現在、世界に猛烈な勢いで普及しようとしている。

BS放送のインフラであるホシの製造（ロッキードマーチン社）と打ち上げ（アリアンスペース社）は外国の技術に依存しているが、半世紀に及ぶ日本の貢献は否定すべくもないものである。

東日本大震災で日本の原子力発電装置の危うさが露呈し、その収束にフランス＋アメリカなどの技術支援が欠かせないようにBSも同じような国際協調プロジェクトとして今日あることを深く認識する必要がある。

6月のBSAT-3cの打ち上げ成功を祈るばかりだ。奇しくも原発事故収束への作業が同時期に重なっていることは単なる偶然とは思えない。

BS文化創造とコンテンツビジネスの振興

BSのコンテンツの受信可能テレビは1億